

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 12

道楽の果て

鹿島釣狂

大チカ見参

第7回大会でものにしたタカノハを魚拓にしてみた。いつも使っている画仙紙は4つ切りのものなので魚がはみ出してしまうため、市内の文房具店や紙店、書道専門店等に全紙を求めたが在庫はなかった。仕方なく4つ切りを糊でつなぎ合わせて買った。色もつけてみたのだが、白黒の方が逞しさが出たので額に入れて書斎に飾った。しかし、どう工夫しても紙の継ぎ目が残ってしまうのが残念だった。



タカノハの魚拓

その魚拓造りの最中に電話がかかってきた。釣友の堀部安兵衛からだ。やはり釣友の赤埴源蔵から1週間前に紋別港で大チカを馬鹿釣りしたという連絡が入ったのだ。それで、一緒に行こうというものだった。大会で疲れた身体を休める必要があって、いったんは断ったが、なんだか諦めきれないようだ。再度電話がかかってきたので道中を共にすることにした。

3号から4号のサビキバリを6種類用意した。今春、サロマ湖の氷上釣りで用意したスバリに加え、ハゲ皮、サバ皮、オーロラスキン、ウイリーなどを組み合わせたものだ。ニンシンもあるかも知れないと6号、8号サビキも用意した。また、スピードエサ付け器とそれを取り付けることの出来る三脚も購入した。竿はどんな場面にも対応できる様にと長さの違う溪流竿4本と磯竿3本を持っていくことにした。

20日(金) 3:30安兵衛宅を出発し、途中旭川で源蔵の車に乗り換えて一路紋別港へと向かった。第2埠頭では、多くの釣り人たちが所狭しと竿を出しており、次々と大チカを釣り上げていた。丁度3人分のスペースを見つけたのでそこで竿を出すことにした。4本の竿を出していた隣の釣り人が少しスペースを譲ってくれた。

まずは5.4m~6.2mのズーム式延べ竿に3.5号のハゲ皮・オレンジウイリー8本バリ仕掛けを結んで、赤アミを擦り付けて振り込んだ。すぐに魚信がありダブルでかかってきた。2本目を準備する暇もなく次々と魚がかかってくる。

それでも、アタリが遠のいたときのために2本目の竿を準備した。5.4mの磯竿に2000番のリールを付けて、その先に10本バリ2本をつなぎ合わせて振り込んだ。すぐに、アタリが出て取り込んだが、付いていた魚は1匹だけだった。それで、20本バリの方は長居させて、もっぱら延べ竿で釣り続けた。磯竿にもアタリは出続けているのだけれど、追い食いさせてなんとか10匹ぐらいにしてから取り込もうと考えたのだが、竿を上げたときは、1番上のハリにしか掛かっていることの方が多かった。

単純作業になってきた。1本の竿を上げる。仕掛に付いた魚を外す。アミを擦り付けて振り込む。もう1本の竿を上げる。やはり魚を外してバケツに入れる。アミを擦り付けて振り込むという流れ作業である。魚がかかっていることはない。仕掛を入れるとすぐにアタリが出るのだが、それはそのままにしてもう1本の竿を上げるのだ。

絶え間なく釣れ続けて12時になった。さすがに釣る気はなくなった。キッチンバサミで頭を取りながら数えてみると私は306匹、安兵衛は444匹、源蔵は236匹だった。やはりチカ釣り仕掛を自作してきた安兵衛に軍配が上がった。

帰りには、源蔵の勧めもあり「まりーさんの木」でカニチャーハンを食べた。人気店と言うだけ合って平日でも混み合っており、カニの肉がたっぷりと入ったボリュームのある逸品だった。

家に着くと孫を連れた娘夫婦が士別から来ていた。義父の1周忌の焼香をするためだ。早速、釣り上げたばかりのチカの天麩羅に、冷凍してあったタカノハの刺身、カジカの荒

汁が添えられて食卓を賑わした。3歳になったばかりの孫はカジカの荒汁を綺麗に平らげてしまった。さすが我が孫である。



8本バリ全部にチカが付いた？実は5本だったのだが、残りのハリにもチカを付けての記念撮影。

忘釣会大会

忘釣会の大会から帰ってきてテレビニュースを見た。防波堤に打ち上がる波飛沫の映像と「釣りの男性二人が行方不明」というものだ。

12月6日午前7時15分ごろ、後志管内泊村盃村の盃漁港カブト分区に釣りに来ていた苫小牧市の会社員二人が海に転落したと119番通報があった。二人は6日午前5時ごろに友人女性とともに同村を訪れ、女性を車に残して同漁港の防波堤の先端近くで釣りを

していたとみられる。小樽海保によると、当時の波の高さは約5m、最大瞬間風速は約15mで、雪が降っていた。「事故前日の夜から防波堤を越える高い波が立っていた。地元の人なら釣りは諦める天候なのだが」というコメントが載っていた。女房にはそんな危険なところには行っていないから安心しろと言っておいた。

ニュースに出たこの日は、「忘釣会」の大会に参加していた。「とんとん会」の大会の折に、ご一緒した菅原信幸氏が誘ってくれたのだ。12月6日、樽岸漁港～千走漁港で開催されるという。代表世話人は篠田秀人氏（北海道釣名人会）で代表幹事長は相川敏明氏（札幌潮鱗会会長）となっていた。この寒い時期にどうかと思うが参加させていただくことにした。岩見沢からは私の他に4名（篠田秀人、山崎 栄、森田正実、五十嵐正人）の参加者で大変心強かった。

「忘釣会」主宰者である篠田秀人氏が、お忙しい身にも拘わらず、私の座席の前の補助椅子に後ろ向きに座ってくれて、楽しくお話しさせて頂いた。釣りの話をするときには、その真剣な眼差しが野武士を思わせ、剣先を突きつけられたようで怖い感じもする。しかし、妙なアクセントで「いいよー」と屈託なく笑うと、その目尻が下がり愛着のある人懐っこい顔になった。

私が釣遊会に入りたてのころ、苫前町の古丹別川河口でアカハラ釣りをしていたことである。背中合わせに入った御仁がその篠田氏だった。アカハラの微妙なアタリを合わせ損ねていると、彼があれこれとアカハラ釣りの真髓を聞かせてくれたのだ。

今日は大荒れの天気予報で、入釣場所は本目漁港と決めた。漁港の入口にある沖堤が波を遮ってくれて防波堤で釣りができると考えたからだ。釣遊会では防波堤での釣りは禁止されているが、忘釣会は可能だということだ。朝方、波が治まってくれば厚瀬崎に移動することも出来る。今日の天気ではここしかないと思ったのだ。

一緒にバスから下りる方がいた。潮鱗会から参加の方だ。一人ではないことになんだか心強い。私にとっては初めての釣り場なので彼に先行を任せた。彼は、外防波堤の先端から一段下がった階段下で竿を出した。私は、その左横に並んだ。仕掛を投げ込むとすぐに小さなアタリが出た。審査規定に届いているかどうかのチビソイだった。

しかし、異常に寒い。雪の混じった北西からの寒風に曝されて、指先が動かなくなってくる。一時、潮鱗会の方の前を通って階段下の壁際に避難することにした。風が頭の上を通り越して温かくさえ感じる。それが一時避難ではなくなってきた。魚のアタリがあったり、エサを取り替えたりする度に、彼の前を通らなくてはならないのだ。彼は嫌な顔を全く見せず（暗くて彼の顔の様子など見えないのだが）、私の気配を感じては何度も身体をよけて通してくれた。

札幌潮鱗会の石川雅人氏だった。「岩見沢釣遊会といえば『北海道のつり』で記事を書いている鹿島釣狂さんと同じ釣り会ですか。」と聞かれたので「その当人です」と挨拶を交わすことになった。彼は、「二人で打ち返せばホッケも寄るので頑張りましょう」と声を掛けてくれた。

石川氏は、とにかく打ち返しが早い。根掛かりして仕掛を失ってしまうこともあるのだが、すぐに新しい仕掛に取り替えて打っている。「また、チビゾイ」だと言いながらも規定に届かないものはすぐにリリースし、審査に提出できるものをフラシに入れて防波堤の際に吊している。全くじっとしていることがない。先日も日高の東栄で仲間が釣りをやめてしまうような嵐の中、持参したロープで身体を吹き飛ばされないようにと括り付けて、一人で釣り続けていたらしい。今年はまだいい思いはしておらず、春の大会で瀬棚の最内から砂取り場でまで歩いて、アカハラ53.0cmで身長賞を獲得したぐらいだとのことだ。根性の釣り師らしい。

その彼が大声を出した。「タコだ」と叫んでいる。「タモがあるからちょっと待って」と声を掛けてから、防潮堤の際に置いてあった漁師が使うタモを持って近づいた。準備が出来たので竿を上げてもいいよと待ち構えると、姿を現したのはカジカだった。そして、その下にタコの足がユラリと引っかかっている。一緒には掬えそうもないので、タコとカジカのどちらにするかと問うと、彼はタコよりもカジカを選んだ。本人にはそのカジカもタコの姿も見えていないのだ。カジカを掬って防波堤の上に上げようとする、下バりに掛かっていたタコの足も上がってきた。しかし、そのタコの足とばかりに思っていたものは、太く長いロープだった。安心してカジカを防波堤に上げた。

その後、全くアタリは出ていない。彼は、舟揚場のある方にカレイを釣りに行くと移動していった。私は、風を避けるために彼のいたところに移動した。先端の灯台のあるところに三脚を設置しようものなら吹き飛ばされてしまう危険があるのだ。この時点での私の獲物は小カジカ3、小ゾイ2だった。一度だけ大きなアタリがあったのだけれど、その仕掛はホッケ狙いでハリスを4号に落としていたため、切れてしまっていたのだ。



石川氏が移動していったので階段下に避難した

ようやく辺りが薄明るくなり始めたのだがアタリは全く出ない。寒さのため打ち返しが緩慢になりマキエも随分と残っている。今日で今年の釣りは終わるのだ。残してもしようがないと全てをネット一杯に詰め込み、更に余ったものをドボンと海に撒いた。引き上げる時間だ。1本の竿を片付け始めた時に、もう1本の竿先がグングンと海面に向かって突き刺さっていく。40cm弱のアブラコでは一発起死回生とはならなかった。



このアブラコでは起死回生は望めず

寿都温泉「ゆべつのゆ」で疲れを癒し食事をとった。忘釣会に誘ってくれた菅原氏に「潮鱗会の石川氏が釣り場を譲ってくれたので、寒さを凌げて最後まで釣りをすることが出来た。」と話していると、私が座った隣がその石川氏だった。暗闇の中でそのご尊顔を拝見してはおらず、石川氏は、なんだか失笑されているようでもあった。

審査の結果、私は16位という残念なものだった。忘釣会は今回で17回目を迎えるので17位に豪華景品が設定されていたのだが一歩及びすぎた。本目灯台のほうまで移動していった石川氏は、そこでカジカを仕留めて7位と健闘した。優勝者は五十嵐正人氏だった。樽岸で身長賞にもなったアカハラ44.5cmや大カジカ、大ハチガラなどを揃えてきた。準優勝は三上秀夫氏でアブラコにカジカを揃えてきた。3位はカジカにクロガシラで伊藤保彦氏だった。どちらも寿都港での釣果だった。



左から優勝：五十嵐正人、準優勝：三上秀夫、3位：伊藤保彦



写真撮影するのは代表世話人：篠田秀人氏 5位の成績だった。

寿都漁港の赤灯台で釣りをした御仁がいた。この猛吹雪の中で、朝まで、そこにいたのだからこれこそ根性の釣り人である。釣り新聞でよくお見かけする太田良弘氏と蔵根高史氏だった。蔵根氏は釣り上げた魚やエサを入れたバツカンが飛ばされてしまったが、残っていたカツオのエサで真ガレイ 40 cmオーバーをものにしていた。

蔵根高史氏（北海道磯釣り会 上砂川町）のブログ「今週末は何しようかな～」を覗いてみた。彼の誕生日である7月20日、11枚のタカノハを釣り、内お持ち帰り6枚の写真と記事が載っていた。釣り場の写真も掲載されており、どこかで見たような風景だなあとグーグルマップで検索してみると、やっぱり〇〇だった。彼はこの場所を仲間に紹介されたようで明らかにしていないので、紹介することははばかれる。大会の折、いつも大時化のために私が入れないで悔しい思いをしているところだった。

この忘釣会に「北の釣り会」の関口敏晴も参加していて私に声を掛けてくれた。彼との出会いは確か3度目となるはずだ。2015「北海道の釣り」5月号で東歌別での出合いを写真付きの記事にしていたのだ。彼は32 cm余りの見事なハチガラを釣ってきた。そして、別れ際に強力栄養ドリンク「ユンケル」を手渡してくれた。

帰りのバスの中で北海道釣名人会の越智靖基の話が聞こえてきた。海猿の最終大会に参加しての銚子岬で、50 cm UPのアブラコを数揃え、頭は60 cm UPのババガレイで脅威の点数をたたき出したというから物凄い。その大会に参加した者から、このバスに乗っている釣り仲間に次から次へと連絡が入ったようだ。また、彼は、今年になってから60 cm UPのタカノハをものにしていうことも聞こえてきた。

忘釣会のように様々な釣り会の強者が乗っている大会に参加してみると、釣りの奥義に触れて魂消てしまったり、当人の心の内の柔らかさや弱さを垣間見たりして、各々が釣りを通して一つの間人間ドラマを展開しているのを感じる。

世の中の酸いも甘いも味わい尽くしたような人が釣りにのめり込んでいく様をみると、釣りは如何なる煩惱にも勝ると思える。寄席の高座などでは、人間の道楽は「飲む、打つ、買う」の三道楽であると言われ、大酒を食らったり、博打にふけったり、女に溺れたりすることは、本人の品位を損ねる元凶となって笑いの種にもされている。「釣りは道楽の果て」と言われているが、酒飲みや博打打ちや女好きと同じようなはまり方をして、魂を抜かれていく。私も、近頃では、釣りという道楽にぞっこん惚れ込んでしまって、抜き足ならない状況に陥ってしまっている。でも、それでいいのだろう。「道楽の果て」なのだから。